新見公立短期大学紀要　第30巻
pp. 23-35, 2009

論　稿

保育所における絵本を軸とした子育て支援と家庭における絵本体験

― 岡山県A町を対象として ―

新藤　慶[1)*]・髙月　教惠[2)]

1）幼児教育学科　2）福山市立女子短期大学保育科

(2009年11月18日受理)

本稿では，保育所に子どもを通わせる保護者へのアンケートを通じて，子どもの絵本体験を検討した。その結果，以下の諸点が明らかとなった。第1に，子どもの絵本体験には，年齢の上昇に伴う差異がみられた。保護者の絵本の与え方でも，子どもの絵本への接し方でも，年齢の上昇に伴い絵を重視する傾向からストーリーを重視する傾向に移行していた。第2に，絵本体験には，ジェンダー差が見られた。男児に比べ，女児の方が早いうちから文に親しむなど，レベルの高い絵本体験をしていた。また第3に，女児に後れをとる男児の絵本体験を補う取り組みも見られた。男児に対しては，保育所での働きかけと，父親の読み聞かせが女児よりも積極的に行われていた。そこで，今後の保育所では，良書の推薦などの絵本選定のサポートや，母親だけでなく父親も対象にした読み聞かせ指導など，絵本を軸とした子育て支援の実施が求められる。

（キーワード）絵本体験，子育て支援，保育所

はじめに

2008年に改訂された現行の幼稚園教育要領では，改訂のポイントの一つとして,「言語活動の充実」が挙げられている[1)]。実際の要領のなかでは，先生や友達の話を聞いたり，逆に自分から話したりすることとともに，絵本や物語を聞くことが，言葉の領域における内容として位置づけられている[2)]。また，同時に改定された保育所保育指針では，改定の重点として言語活動の充実があるとは明言されていないが，幼稚園教育要領と同様，保育士や友達との会話やごっこ遊びでのやりとり,あるいは絵本や物語を聞くことが,言葉の内容として掲げられている[3)]。

このうち絵本は,保育現場で取り上げられるだけでなく,家庭における子育てでも，読み聞かせという形で取り入れられている。その意味で絵本は，保育現場と家庭とを架橋して実践される保育内容とも捉えられる。そのため，家庭での読み聞かせが，いかなる親の意識の下で行われているのか，頻度や時間はどのようになっているのか，あるいは子どもたちの反応はどういったものなのかなど，家庭での読み聞かせの実態を把握しようとする研究が積み重ねられてきた[1)4)~9)]。ただし，絵本体験の研究は，保育現場と家庭とのそれぞれを舞台とするものがまったく別個に進められており，家庭における読み聞かせを保育現場での絵本体験と関連づけて検討する意識は弱い[7)]。

そのようななか，横山真貴子らの一連の研究[1)7)8)]は，この弱点を克服するものである。横山らは，幼稚園における絵本との関わりが，子どもの絵本との接し方にもたらす影響を分析するため，3年にわたって同じ子の母親を対象としたパネル調査を行い，各年齢段階における幼稚園での絵本との関わりと家庭での絵本経験との関連を検討している。これらの研究からは，家庭での絵本体験が少ない子どもにとっては，幼稚園での絵本との関わりがその体験の不足を補っていること，あるいは家庭で読まれる絵本とは異なるジャンルの絵本が幼稚園で取り上げられることで，絵本の幅の広がりが見られること，さらに幼稚園での絵本との関わりが子どもを絵本好きにしており，その傾向は通園期間が長いほど強く見られること,などが明らかになった。

しかし,保育現場での時間の長さだけを取り上げるなら,原則満3歳以上でしかない幼稚園の子どもだけでなく，3歳未満児も含まれる保育所の子どもを調査することも大きな意義を持つ。また，そもそも幼稚園の子どもと保育所の子どもとで，絵本との関わりが異なるのかを検討することも重要な課題となる。しかし，これまでの先行研究では，保育所に通う子どもの家庭での絵本体験を明らかにする試みはほとんど行われてこなかった。そこで，保育所に通う子どもの家庭における絵本体験をその保護者に対する調査から明らかにすることで，保育所における絵本指導の一助とすることが本研究の課題である。

その際，上記の年齢による差異だけでなく，ジェンダーによる差異にも着目したい。先行研究では，子どもの性別

*連絡先：新藤　慶　幼児教育学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

に着目した分析はほとんど見られない。また，読み聞かせを行う側についても，大半が母親への調査に限定されており，一部の研究[6)9)]を除いては，父親等他の者による読み聞かせのあり方についてはあまり触れられていない。その点で，読み聞かせる側のジェンダーの違いにも一定の配慮を行いながら分析を進めたい。

これらの諸分析に取り組むために，ここでは岡山県A町保育協議会が実施した保護者アンケートの分析を行う。A町の保育所は，長年絵本活動に取り組んできた。特に貸出絵本に力を入れており，児童ごとに貸出カードを作成し，その記録をもとに絵本体験の傾向を把握し，必要に応じて保護者に対してもアドバイスを行っている。これは，いわば絵本を軸とした子育て支援実践とも捉えられる。絵本体験をより豊かにするためには，まずは保護者自身が絵本の魅力を知ることが大切であり，それを促すような子育て支援のあり方が重要であるとの指摘も見られる[1)]。その意味では，A町では先駆的な取り組みが行われているといえる。そのため，この保護者アンケートの結果には，こうしたA町の先駆的な取り組みの効果を一定程度見出すこともできる。ただし，一時点の調査データであるため，これだけで取り組みの効果を探るのには難点もある。その点で本稿は，今後のA町における取り組みの成果を探るための基礎資料を提示することももう一つの課題としている。

そこで，以下では，調査の方法と調査データの概要を確認したうえで（Ⅰ節），保護者の読み聞かせの実態を明らかにする（Ⅱ節）。さらに，家庭での子どもの絵本体験をまとめ（Ⅲ節），先行調査との比較検討を行う（Ⅳ節）。最後に若干の考察を行い，まとめとする（まとめ）。

Ⅰ．調査の方法とデータの概要

1．調査の方法

本調査は，2007年に，A町内の7つの保育所に子どもを通わせる保護者を対象に行われた。有効回収は238票であった。

調査票は，奈良女子大学文学部附属幼稚園幼年教育研究会が1975年に幼稚園児を対象に実施したもの[4)]を採用した。この調査票を用いた理由は，子どもの家庭における絵本体験の基礎的事項をコンパクトに網羅していること，また，執筆者のうち髙月がこの研究会の調査研究に参加しており，調査内容に精通していること，さらに，同一の調査票を用いることで比較分析が行えること，が挙げられる。

なお，調査の実施に当たっては，本調査で得られたデータは研究目的にのみ利用すること，調査は無記名で行い，個人が特定される恐れのないこと，調査の趣旨に賛同できる場合にのみ協力いただければよいこととの条件の下で実施された。

2．調査データの概要

本調査に協力していただいた保護者の子どもたちは，表1の通りである。男児が122人，女児が116人と，性別はほぼ半々である。年齢別にみると，1歳児が17.6%，2歳児が15.1%，4歳児が18.1%とやや少なく，3歳児が23.9%，5歳児が25.2%と相対的に多い。ただ，全体としてみればそれほど大きな差ではなく，ほぼ均等に分布していると捉えられる。

表1　調査対象者の子どもの保育所別・性別・年齢別分布
（単位：人，%）

		1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	N
A園	男	35.3	17.6	5.9	23.5	17.6	17
	女	-	15.8	26.3	31.6	26.3	19
	合計	16.7	16.7	16.7	27.8	22.2	36
B園	男	12.5	25.0	31.3	12.5	18.8	16
	女	-	25.0	25.0	25.0	25.0	8
	合計	8.3	25.0	29.2	16.7	20.8	24
C園	男	15.8	15.8	31.6	10.5	26.3	19
	女	23.5	5.9	35.3	17.6	17.6	17
	合計	19.4	11.1	33.3	13.9	22.2	36
D園	男	10.5	15.8	36.8	15.8	21.1	19
	女	6.7	13.3	6.7	33.3	40.0	15
	合計	8.8	14.7	23.5	23.5	29.4	34
E園	男	14.3	28.6	-	28.6	28.6	7
	女	33.3	-	16.7	16.7	33.3	6
	合計	23.1	15.4	7.7	23.1	30.8	13
F園	男	9.5	9.5	19.0	23.8	38.1	21
	女	14.7	11.8	20.6	11.8	41.2	34
	合計	12.7	10.9	20.0	16.4	40.0	55
G園	男	43.5	21.7	21.7	4.3	8.7	23
	女	23.5	11.8	41.2	17.6	5.9	17
	合計	35.0	17.5	30.0	10.0	7.5	40
合計	男	21.3	18.0	23.0	15.6	22.1	122
	女	13.8	12.1	25.0	20.7	28.4	116
	合計	17.6	15.1	23.9	18.1	25.2	238

Ⅱ．家庭における保護者の読み聞かせの実態と意識

1．絵本を選ぶ観点

1）全体の傾向

それでは最初に，保護者はどのような観点で絵本を選んでいるのかをみていく。この点をまとめたものを，表2に

掲げた。これをみると,「子どもがほしがる」がもっとも多く72.1%，次いで「話の内容がよい」が59.2%,「絵がよく描かれている」が43.3%と続いている。後藤らも，絵本の選び方として「子どもが読みたいと思う絵本」が7割前後ともっとも多く挙げられていることを指摘している[6)]。つまり，子どもに選ばせることが多く，それに加えて，話や絵という絵本の中身それ自体を保護者自身が見て選ぶという状況になっていることがわかる。他者の薦めなどは,「新聞・雑誌・テレビなどの書評による」が12.0%となっているくらいで，ほとんどは1割未満である。基本的には，絵本は親子自身が選んでいると捉えられる。

表2　保護者が絵本を選ぶ観点（複数回答　単位：人，%）

ア　家族・親類のすすめによる	18(　7.7)
イ　子どもがほしがる	168(72.1)
ウ　絵がよく描かれている	101(43.3)
エ　子どもの友達のものと同じ	2(　0.9)
オ　話の内容がよい	138(59.2)
カ　絵と話がよくあっている	47(20.2)
キ　新聞・雑誌・テレビなどの書評による	28(12.0)
ク　値段が手頃である	93(39.9)
ケ　本が丈夫にできている	27(11.6)
コ　出版社による	0(　0.0)
サ　書店ですすめられる	6(　2.6)
シ　保育園で見た	36(15.5)
ス　友人のすすめによる	4(　1.7)
合計	233(100.0)
M.T.計	668(286.7)

2）因子分析による傾向の分類

この絵本を選ぶ観点をいくつかの傾向に分類するため，因子分析を行った。その結果が，表3である。ここからは，6つの因子が抽出された。第1因子は,「絵がよく描かれている」「子どもがほしがる」で高い正の値,「新聞・雑誌・テレビなどの書評による」で負の値をとっている。つまり，書評に頼らず，絵と子どもの興味で選んでいるので,「子が好む絵重視」の傾向と捉えられる。特に，表2で確認した「子どもがほしがる」と「絵がよく描かれている」というのが両立したものであることは，注意しておきたい。

第2因子は,「話の内容がよい」で高い正の値,「家族・親類のすすめによる」「書店ですすめられる」で負の値を示しており，周囲の薦めとは関係なく話の内容で選んでいるので,「ストーリー重視」の傾向と捉えられる。第3因子は,「保育園で見た」で高い正の値をとっており，保育所で読み聞かせられたり，保育所に置かれたりしている本を選ぶ傾向である。そこで,「保育所重視」の傾向といえる。第4因子は,「本が丈夫にできている」で高い正の値をとっており,「体裁重視」の傾向と位置づけられる。第5因子は,「絵と話があっている」で高い正の値であるので，絵とストーリーのいずれにも価値を置く,「調和重視」の傾向であると解釈できる。第6因子は,「値段が手頃である」で高い正の値をとり,「友人のすすめによる」「子どもの友達のものと同じ」で弱い負の値をとっている。こちらは，親子の友人が持つ絵本との関わりと関係なく，値段を重視しているので,「価格重視」の傾向と捉えられる。なお，因子相関行列を確認すると，いずれの因子間にも相関関係はほとんど見られず，独立した因子であることがわかる。

3）性別による違い

それでは，これらの因子が，子どもの属性によってどのように異なるのかをみてみたい。まず，性別による違いをみると，表4のようになる。ここからは，男児の方で,「保育所重視」と「体裁重視」の傾向が強いことがうかがえる。つまり，男児の方では，家庭独自の観点だけでなく，保育所で触れたものが選ばれやすく，また，男児の方が乱暴に扱うとの認識があってか，丈夫なものが選ばれやすくなっていることがわかる。

4）年齢による違い

続いて，年齢による違いをみてみたい。この点をまとめた表5をみると，ほとんどの因子で，年齢による有意差が生じていないことがわかる。ただし，唯一「子が好む絵重視」だけは有意差が生じており，年齢が上がるにつれて因子得点の平均値が下がる傾向にある（図1）。このことから，子どもがほしがるような絵が描かれている絵本を選ぶ傾向は低年齢児に多く，年齢が上がるにつれ別の観点から絵本の選定を行っていることがわかる。

一方，厳密な有意差はないが,「ストーリー重視」は，年齢が高くなるにつれて，因子得点の平均値が上昇している（図1）。このことから，年齢の上昇に伴い，絵本選定の基準が「子どもが好む絵重視」から「ストーリー重視」へとスライドしていくと捉えられる。

以上のように，絵本選定の基準は「子どもがほしがる」「話の内容がよい」「絵がよく描かれている」が中心を占めるが，低年齢では「子どもがほしがる」「絵がよく描かれている」という「子どもが好む絵重視」の傾向が強く，年齢が上昇するにつれて，それに代わって「話の内容がよい」という「ストーリー重視」の傾向が強まる様子が確認できた。

2．読み聞かせをする人・読み聞かせの時間

1）主に読み聞かせをする人

それでは，このようにして選ばれた絵本は，どのような形で読み聞かせられているのだろうか。まず，主に読み聞かせをする人を表6にまとめた。これをみると，全体としては，母親が87.8%，次いで父親が33.6%，さらに祖母が

表3　絵本選定の理由の因子分析結果

	第1因子 子が好む絵重視	第2因子 ストーリー重視	第3因子 保育所重視	第4因子 体裁重視	第5因子 調和重視	第6因子 価格重視
ウ　絵がよく描かれている	0.998	0.011	-0.013	0.012	0.024	-0.110
イ　子どもがほしがる	0.450	0.018	-0.116	-0.011	-0.130	-0.004
キ　新聞・雑誌・テレビなどの書評による	-0.125	-0.069	-0.014	-0.091	-0.067	-0.116
オ　話の内容がよい	-0.043	0.998	-0.132	-0.115	0.041	-0.311
ア　家族・親類のすすめによる	-0.067	-0.182	0.052	-0.003	-0.135	-0.003
サ　書店ですすめられる	-0.062	-0.142	-0.073	-0.061	-0.082	0.030
シ　保育園で見た	-0.088	-0.108	0.995	-0.016	-0.064	-0.075
ケ　本が丈夫にできている	0.002	-0.072	-0.012	0.997	-0.018	-0.058
カ　絵と話がよくあっている	-0.082	0.136	-0.070	-0.031	0.992	-0.091
ク　値段が手頃である	-0.142	-0.283	-0.147	-0.132	-0.156	0.997
ス　友人のすすめによる	-0.087	0.104	-0.062	-0.052	-0.080	-0.118
エ　子どもの友達のものと同じ	0.008	-0.019	-0.037	-0.032	-0.044	-0.078

因子抽出法：最尤法　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関行列

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
第1因子		-0.017	-0.024	0.040	0.005	-0.108
第2因子			-0.122	-0.087	0.073	-0.312
第3因子				0.017	-0.023	-0.119
第4因子					0.013	-0.091
第5因子						-0.120

表4　性別にみた絵本選定因子得点の平均

	子が好む絵重視	ストーリー重視	保育所重視	体裁重視	調和重視	価格重視
男	0.050	-0.008	0.046	0.063	0.047	-0.106
女	-0.052	0.009	-0.048	-0.066	-0.050	0.111
有意確率	p=.762	p=.974	p<.05	p<.1	p=.281	p=.282

注）有意確率は、Kruskal-Wallis 検定により算出。

表５　年齢別にみた絵本選定因子得点の平均

	子が好む絵重視	ストーリー重視	保育所重視	体裁重視	調和重視	価格重視
１歳	0.489	-0.143	-0.311	0.404	-0.003	-0.043
２歳	0.100	-0.162	0.033	-0.100	-0.106	0.341
３歳	-0.157	-0.049	0.202	-0.189	-0.095	-0.128
４歳	-0.026	-0.047	0.032	-0.133	0.042	-0.041
５歳	-0.235	0.277	-0.017	0.052	0.125	-0.023
有意確率	p<.01	p=.111	p=.665	p=.297	p=.384	p=.182

注）有意確率は、Kruskal-Wallis 検定で算出。

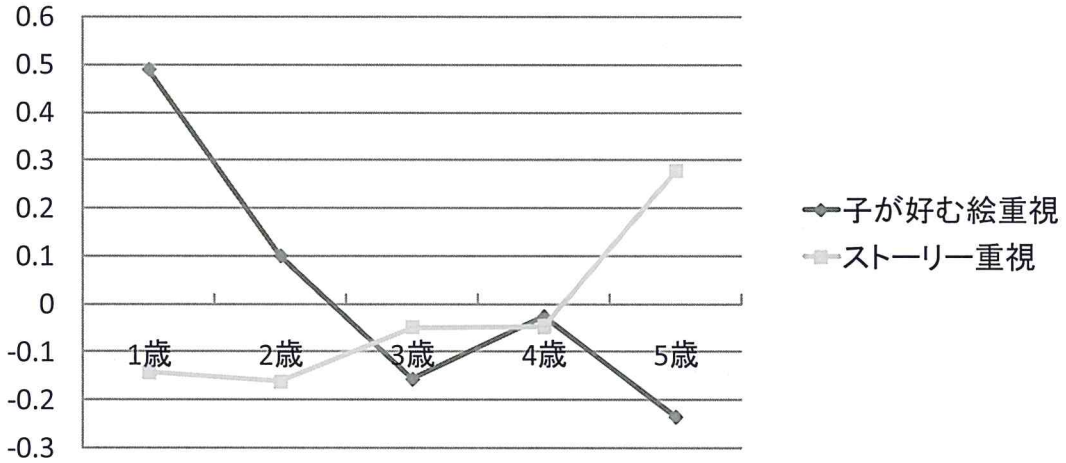

図１　年齢別にみた絵本選定因子得点の平均値

20.2%となっている。圧倒的に，母親が読み聞かせを行うケースが多い。横山らの調査でも「母親」が94.7%，「父親」が42.1%となっており，ほぼ同様の傾向を示している[1)]。

ただし，父親については，子どもが男児である場合には読み聞かせを行うことが多く，３歳以上では，女児に比べて10～20ポイント程度，読み聞かせを行う割合が高くなっている。年長の男児と父親の間なら，読み聞かせが比較的行われやすいことがわかる。そして，このことは読み聞かせが行われる時間とも関わりを持っている。

２）主に読み聞かせる時間

主に読み聞かせを行う時間を，表７に掲げた。これをみると，「就寝前」が66.4%ともっとも多くなっており，先行研究[1)8)]とも符合している。以下，「夕食後」(27.7%)，「降園後」(19.3%) と続いている。この「就寝前」をよく見てみると，女児が62.1%であるのに対し，男児では70.5%となっている。また，１歳児では47.6%にとどまっているのに対し，他の年齢層では７割前後に達している。このように，女児よりは男児で，あるいは年少よりは年長で「就寝前」に読み聞かせが行われることが多くなっている。これらを組み合わせると，年長の男児では「就寝前」に読み聞かせが行われるケースが多いといえる。このことと，先程の年長の男児に対しては比較的父親の読み聞きかせが多く行われていることとを重ね合わせると，年長の男児では，帰宅の遅くなりがちな父親が，就寝前に読み聞かせを行う場合が多いと捉えられるだろう。

一方，「就寝前」での読み聞かせが少ない分，女児では「夕食後」に読み聞かせが行われることが多い（女児30.2%，男児25.4%）。また，年少児では，「夕食後」に加えて，「降園後」も多い（１歳児では「夕食後」45.2%，「降園後」28.6%）。女児や年少児では，降園後の比較的早い時間帯に読み聞かせが行われることで，年長男児に見られる就寝前の分を補っていると理解できる。

３．読み聞かせ方

それでは，実際の読み聞かせはどのように行われているのだろうか。この点を，表８にまとめた。回答は，ここで挙げた４つの読み方について，頻度が高いものから順位をつけてもらう方法をとった。そこで挙げられた順位の高い

表6　主に読み聞かせをする人（複数回答　単位：人，%）

		父	母	兄	姉	祖父	祖母	その他	N	M.T.計
1歳	男	26.9	100.0	3.8	11.5	0.0	7.7	0.0	26	149.9
	女	25.0	87.5	0.0	12.5	12.5	12.5	0.0	16	150.0
	合計	26.2	95.2	2.4	11.9	4.8	9.5	0.0	42	150.0
2歳	男	40.9	86.4	4.5	9.1	0.0	18.2	0.0	22	159.1
	女	42.9	85.7	0.0	7.1	7.1	21.4	0.0	14	164.2
	合計	41.7	86.1	2.8	8.3	2.8	19.4	0.0	36	161.1
3歳	男	42.9	89.3	7.1	7.1	7.1	42.9	3.6	28	200.0
	女	34.5	96.6	3.4	10.3	6.9	27.6	0.0	29	179.3
	合計	38.6	93.0	5.3	8.8	7.0	35.1	1.8	57	189.6
4歳	男	42.1	89.5	5.3	15.8	5.3	10.5	0.0	19	168.5
	女	29.2	83.3	4.2	4.2	20.8	25.0	4.2	24	170.9
	合計	34.9	86.0	4.7	9.3	14.0	18.6	2.3	43	169.8
5歳	男	40.7	85.2	3.7	3.7	3.7	18.5	11.1	27	166.6
	女	18.2	75.8	3.0	6.1	0.0	12.1	21.2	33	136.4
	合計	28.3	80.0	3.3	5.0	1.7	15.0	16.7	60	150.0
全体	男	38.5	90.2	4.9	9.0	3.3	20.5	3.3	122	169.7
	女	28.4	85.3	2.6	7.8	8.6	19.8	6.9	116	159.4
	合計	33.6	87.8	3.8	8.4	5.9	20.2	5.0	238	164.7

表7　主に読み聞かせる時間帯（複数回答　単位：人，%）

		登園前	昼間	降園後	夕食後	就寝前	その他	N	M.T.計
1歳	男	0.0	11.5	38.5	42.3	53.8	3.8	26	149.9
	女	12.5	6.3	12.5	50.0	37.5	6.3	16	125.1
	合計	4.8	9.5	28.6	45.2	47.6	4.8	42	140.5
2歳	男	4.5	4.5	18.2	27.3	77.3	0.0	22	131.8
	女	0.0	0.0	21.4	35.7	57.1	0.0	14	114.2
	合計	2.8	2.8	19.4	30.6	69.4	0.0	36	125.0
3歳	男	0.0	10.7	21.4	25.0	75.0	3.6	28	135.7
	女	6.9	3.4	20.7	44.8	69.0	6.9	29	151.7
	合計	3.5	7.0	21.1	35.1	71.9	5.3	57	143.9
4歳	男	0.0	0.0	10.5	15.8	78.9	5.3	19	110.5
	女	12.5	4.2	20.8	20.8	70.8	0.0	24	129.1
	合計	7.0	2.3	16.3	18.6	74.4	2.3	43	120.9
5歳	男	3.7	11.1	7.4	14.8	70.4	18.5	27	125.9
	女	6.1	12.1	18.2	12.1	63.6	6.1	33	118.2
	合計	5.0	11.7	13.3	13.3	66.7	11.7	60	121.7
全体	男	1.6	8.2	19.7	25.4	70.5	6.6	122	132.0
	女	7.8	6.0	19.0	30.2	62.1	4.3	116	129.4
	合計	4.6	7.1	19.3	27.7	66.4	5.5	238	130.7

ものから，４点，３点，２点，１点と点数をつけている。したがって，平均値の高いものほど，頻繁に行われていると捉えられる。

表８　性別にみた読み聞かせ方

		人数（人）	平均値	標準偏差
文をそのまま読む	男	99	3.06	1.168
	女	94	3.14	1.123
	合計	193	3.10	1.144
子どもにわかるように読みかえる	男	95	2.96	1.020
	女	92	3.00	0.926
	合計	187	2.98	0.973
絵を見ながら子どもの想像したままを話させる+	男	92	1.98	0.914
	女	89	1.75	0.816
	合計	181	1.87	0.872
話し合いながら読み進める	男	93	2.09	0.917
	女	91	2.13	0.945
	合計	184	2.11	0.929

＋　$p<.1$（χ^2検定）

そのことを確認したうえで表８をみると，頻度の高い方から,「文をそのまま読む」→「子どもにわかるように読みかえる」→「話し合いながら読み進める」→「絵を見ながら子どもの想像したままを話させる」という順になっている。ただし，性別の違いに着目すると,「絵を見ながら子どもの想像したままを話させる」が男児で有意に多いことがわかる。これは，男児の場合，黙って聞くことが相対的に難しいことをうかがわせる。

さらに，これを年齢別にみたものが表９である。これをみると，いずれの読み聞かせ方も厳密な有意差はなく，その意味では年齢による読み聞かせ方の違いはない。ただし，比較的有意確率の低い項目に着目すると,「絵を見ながら子どもの想像したままを話させる」や「子どもにわかるように読みかえる」は年齢の上昇に伴って減少する一方,「文をそのまま読む」は年齢の上昇に伴って増加している（図２）。したがって，はじめは「絵を見ながら子どもの想像したままを話させる」といった絵を中心とした読み聞かせ方から始まるが，年齢の上昇に伴い「文をそのまま読む」というストーリーを中心とした読み聞かせ方に移行していく様子がうかがえる。

４．小括

以上，保護者の読み聞かせ方を見てきたが，ここからは３点のことが指摘できるだろう。第１に，保護者は主として，子どもの興味，絵，ストーリーの３点で絵本を選んでいること，第２に，子どもの年齢が上昇するに従い，絵本の選定も読み聞かせ方も，絵中心からストーリー中心に代わっていくこと，第３に，年長の男児の場合には，父親が読み聞かせに参加しやすいこと，である。

それでは，実際に読み聞かせられている子どもは，どのような絵本体験をしているのだろうか。次節では，この点を確認していく。

Ⅲ．家庭における子どもの絵本体験

１．絵本への好意度

まず，どの程度の子どもたちが，絵本が好きなのかをみる。この点をまとめた表10をみると，全体としては86.6%が「好きな方だと思う」となっており，大半の子どもが絵本好きだと捉えられていることがわかる。また，性別に着目すると，全体では男児の86.1%，女児の87.1%が絵本好

表９　年齢別にみた読み聞かせ方

	文をそのまま読む	子どもにわかるように読みかえる	絵を見ながら子どもの想像したままを話させる	話し合いながら読み進める
１歳	2.85	3.24	2.03	1.94
２歳	3.00	3.07	1.93	2.04
３歳	2.98	2.98	2.03	2.07
４歳	3.09	2.91	1.87	2.28
５歳	3.41	2.81	1.62	2.17
合計	3.10	2.98	1.87	2.11
有意確率	p=.194	p=.162	p=.110	p=.650

注）有意確率は、Kruskal-Wallis 検定で算出。

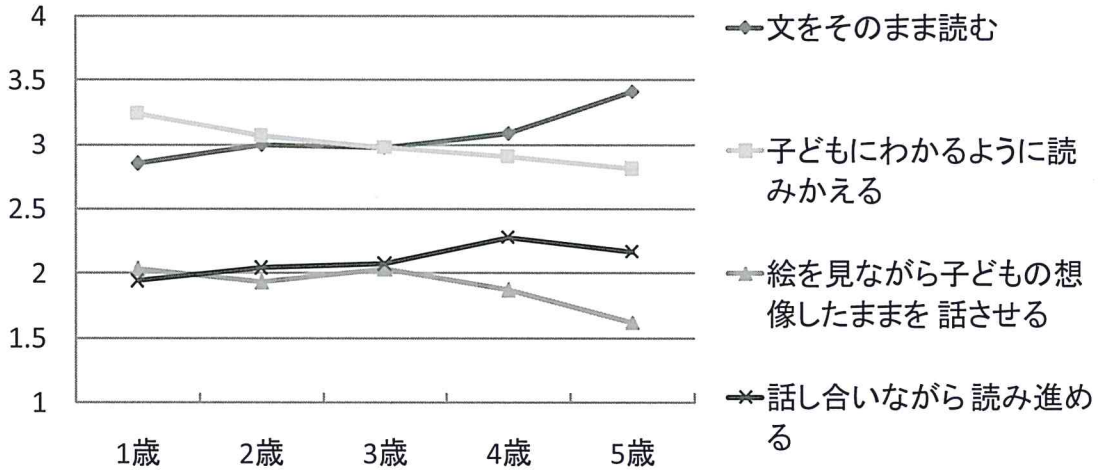

図２　年齢別にみた読み聞かせ方の平均値

きとされており，違いは見られない。また，年齢別にみると，５歳児でややその割合が低下するが，おおむね約８～９割の水準で絵本好きだと答えられている。しかし，１歳児と２歳児では，性別による違いが見られる。１歳児では，絵本好きの割合が，男児で96.2%であるのに対して女児は75.0%であり，２歳児では男児が81.8%であるのに対して女児では100.0%となっている。つまり，１歳児では相対的に男児が，２歳児では相対的に女児が，絵本好きの割合を高くしている。

この背景には，女児に見られる絵本との特徴的な関わり方が関連している。絵本嫌いの理由をまとめた表11をみると，１歳児の女児の場合，外遊びなど他の遊びの方が好きで，絵本への興味が薄いことがうかがえる。ところが，２歳になると,「よく絵本を出して見る」や「よく絵本を読んでほしいとせがむ」など，女児の方が男児よりも絵本に積極的な関わりを持とうとする様子が見られ，絵本好きな理由として挙げられる項目数も多い（表12)。このことから，男児に比べて，女児は２歳にははっきりと絵本に興味を持つようになっていることがうかがえる。このような女児の

表11　絵本嫌いの理由（複数回答　単位：人，%）

		外遊びの方が好きである	絵本を買ってもらってもあまり喜ばない	絵本を読んでほしいということが少ない	絵本より他の遊びの方が好きである	N	M.T.計
1歳	男	100.0	50.0	100.0	0.0	2	250.0
	女	33.3	33.3	33.3	66.7	3	166.6
2歳	男	50.0	50.0	25.0	0.0	4	125.0
	女	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0

表10　年齢別・性別にみた絵本の好悪（単位：人，%）

		好きな方だと思う	あまり好きな方ではない	N
1歳*	男	96.2	3.8	26
	女	75.0	25.0	16
	合計	88.1	11.9	42
2歳+	男	81.8	18.2	22
	女	100.0	-	14
	合計	88.9	11.1	36
3歳	男	82.1	17.9	28
	女	93.1	6.9	29
	合計	87.7	12.3	57
4歳	男	89.5	10.5	19
	女	91.7	8.3	24
	合計	90.7	9.3	43
5歳	男	81.5	18.5	27
	女	78.8	21.2	33
	合計	80.0	20.0	60
全体	男	86.1	13.9	122
	女	87.1	12.9	116
	合計	86.6	13.4	238

* $p<.05$、+ $p<.1$（χ^2検定）

表12　絵本好きの理由（複数回答　単位：人，%）

		よく絵本を出して見る	絵本を買ってもらうと喜ぶ	よく絵本を読んでほしいとせがむ	その他	N	M.T.計
1歳	男	78.3	26.1	52.2	4.3	23	160.9
	女	91.7	25.0	50.0	16.7	12	183.4
2歳	男	77.8	55.6	61.1	0.0	18	194.5
	女	92.9	42.9	71.4	0.0	14	207.2

早期からの絵本への興味が，低年齢での絵本好きの傾向に性差が見られた要因と考えられる。

2．絵本好きになるきっかけ

このように，性別によって絵本への興味の持ち方が異なることには，絵本好きになるきっかけが関わっている。

保護者が，自分の子が絵本好きであると気づいた時期は，平均で男児23.69か月，女児で22.62か月であり，ほとんど差はない。しかし，絵本好きになるきっかけをまとめた表13をみると，一定の性差が見られる。全体としては，「身近に絵本好きがいる」が57.9%，「家の中に絵本が多い」が51.3%，「保育園で絵本をみた」が39.6%となっている。これらのいずれの項目でも，男児より女児で選択される割合が高く，のべ選択数も女児の方が多い。これらのことから，女児の方が絵本好きになるきっかけを多く有していると受け止められる。

それでは，絵本好きになるきっかけとしてもっとも大きな影響をもたらしている「身近にいる絵本好き」とは誰なのだろうか。この点を表14にまとめた。これをみると，全体としては「母」が47.4%ともっとも多く，ついで「姉」が28.1%，「兄」と「祖父母」が26.3%となっている。これを性別に着目して見てみると，母親が挙げられる割合が女児54.2%，男児40.0%と，女児の方で高くなっていることがわかる。これは，女児において，特に母親の影響が強く表れることを示すものと捉えられる。一方，興味深いのは，男児・女児ともに，異性のきょうだいからの影響が大きいことである。男児の場合，「姉」が挙げられる割合が34.5%と，女児よりも12ポイント以上高くなっている。逆に女児の場合は，「兄」が挙げられる割合が28.8%と，男児よりも5ポイント程度多くなっている。このように，「男児と姉」「女児と兄」という異性のきょうだい間で絵本好きの影響が伝達されている。このことは，性別による遊び方の違いが存在するなかで，異性の間でも共通に遊ぶことができる道具として絵本が位置づいていることをうかがわせる。

以上のように，身近な絵本好きからの働きかけや，家や保育所で絵本に触れさせることが，絵本好きにさせることにとって大きな影響を持つことがわかった。とりわけ女児においては，その絵本好きになるきっかけが豊富に存在しており，そのことが，女児において比較的早い時期から絵本に興味を持つ傾向が見出されることにつながっているものと考えられる。

3．好きな絵本

このようにいくつかのきっかけが重なりながら子どもの絵本への興味が育てられているが，子ども自身は，好きな絵本とどのような関わりをしているのだろうか。まず，子どもに好きな絵本があるかどうかをまとめた表15をみると，全体としては63.4%に好きな絵本があり，性差は存在

表13　性別に見た絵本好きになるきっかけ（複数回答　単位：人，%）

	身近に絵本好きがいる	家の中に絵本が多い	よい絵本に出会った	室内遊びが多い	ひとり遊びが多い	保育園で絵本を見た	その他	N	M.T.計
男	54.5	46.5	17.8	7.9	5.9	35.6	11.9	101	180.1
女	61.5	56.3	18.8	9.4	8.3	43.8	8.3	96	206.4
合計	57.9	51.3	18.3	8.6	7.1	39.6	10.2	197	192.9

表14　性別に見た身近にいる絵本好きな人（複数回答，%）

	父	母	兄	姉	祖父母	親類	友達	その他	N	M.T.計
男	20.0	40.0	23.6	34.5	29.1	7.3	7.3	0.0	55	161.8
女	20.3	54.2	28.8	22.0	23.7	8.5	3.4	0.0	59	160.9
合計	20.2	47.4	26.3	28.1	26.3	7.9	5.3	0.0	114	161.4

表15　性別にみた好きな絵本の有無（単位：人，%）

	ある	ない	N
男	63.8	36.2	116
女	63.0	37.0	108
合計	63.4	36.6	224

p=.897（χ^2検定）

しないことがわかる。

子どもたちは，この好きな絵本とどのように関わっているのだろうか。保護者が，なぜ子どもがその絵本を好きだと思うのかについて理由をたずねた結果をまとめた表16をみると，お気に入りの絵本を「たびたび読んでくれとせがむ」(72.3%）や，「いつも取り出して見る」(46.8%）といった形での関わりを見せていることがわかる。

表16　性別にみた好きな絵本の理由
（複数回答　単位：人，%）

	たびたび読んでくれとせがむ	いつも取り出して見る	友達に貸すのを嫌がる	その他	N	M.T.計
男	69.0	43.7	0.0	14.1	71	126.8
女	75.7	50.0	2.9	11.4	70	140.0
合計	72.3	46.8	1.4	12.8	141	133.3

4．一人読みの様子

このように，子どもはお気に入りの絵本があれば，取り出して一人読みをすることもある。それでは，この一人読みはどのようになされているのだろうか。一人読みの形態を4つ挙げ，頻繁に見られる順に4～1の得点を与えて集計した結果を，表17にまとめた。これをみると，全体としては「絵を見て思いのままに話す」が平均値2.94ともっとも高く，逆に「文字の拾い読みをする」が2.19ともっとも低くなっている。このことから，一人読みでは，文字よりも絵を中心に見ている様子がうかがえる。

表17　性別にみた一人読みの仕方

		人数(人)	平均値	標準偏差
だまって絵を見ていく	男	101	2.61	1.067
	女	99	2.37	1.093
	合計	200	2.50	1.084
絵を見て思いのままに話す	男	99	2.95	1.004
	女	98	2.94	1.053
	合計	197	2.94	1.026
文字の拾い読みをする*	男	90	1.94	1.174
	女	95	2.42	1.293
	合計	185	2.19	1.256
気に入ったところだけを見る*	男	103	2.67	0.974
	女	98	2.38	0.925
	合計	201	2.53	0.959

*　p<.05（χ^2検定）

ただし，性別に着目すると，「文字の拾い読みをする」程度は女児で有意に高く，「気に入ったところだけを見る」程度は男児で有意に高いことがわかる。つまり，女児は文字にも一定の興味を持って，それを読もうとしているのに対し，男児では気に入ったところだけを見るという絵本の読み方が多く見られるということである。

さらに，年齢別にみると，これら2つの読み方で有意差

表18　年齢別にみた一人読みの仕方

	だまって絵を見ていく	絵を見て思いのままに話す	文字の拾い読みをする	気に入ったところだけを見る
1歳	3.11	2.88	1.11	3.00
2歳	2.28	3.33	1.59	2.84
3歳	2.58	3.25	1.93	2.37
4歳	1.91	3.19	2.62	2.43
5歳	2.50	2.35	3.00	2.20
合計	2.50	2.94	2.19	2.53
有意確率	p=.123	p=.985	p<.01	p<.05

注）有意確率は、Kruskal-Wallis 検定で算出。

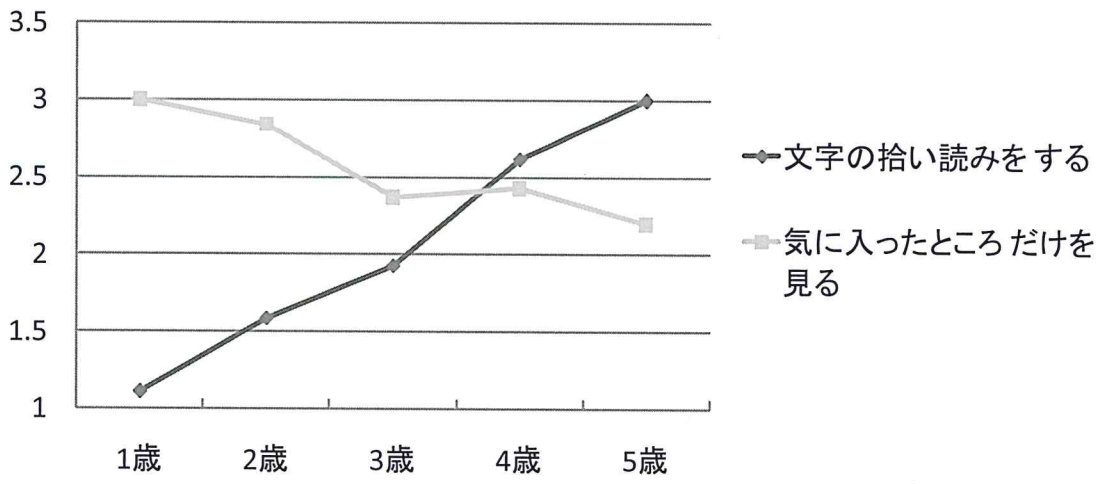

図３　年齢別にみた一人読みの仕方の平均値

が生じている（表18）。これを図に表すと，「気に入ったところだけを見る」は年齢が上昇するにつれて減少し（図３），「文字の拾い読みをする」は年齢が上がるにつれて増加する様子がわかる（図３）。つまり，「だまって絵を見ていく」や「絵を見て思いのままに話す」は，ある程度年齢に関係なく見られるが，年齢の上昇に伴い，「気に入ったところだけを見る」から「文字の拾い読みをする」という読み方へと変化する様子が看取できる。その意味では，「文字の拾い読みをする」というのは上の年齢の幼児に見られる比較的高度な読み方であり，その読み方を頻繁に行っている女児は，高いレベルで絵本と接していると捉えられるだろう。

５．小括

以上，子どもの絵本体験についてみてきた。ここから明らかになったのは，次の３点である。第１に，年齢の上昇に伴って，「気に入ったところだけを見る」読み方から，「文字の拾い読みをする」という読み方へと変化していくこと，第２に，「文字の拾い読み」は男児よりも女児で頻繁に見られ，その点では女児の方がレベルの高い読み方をしていること，第３に，そのようなレベルの高い読み方には，女児の方が絵本好きになるきっかけが多様に用意されていることが関わりを持つこと，である。

それでは，次節では，ここで明らかになった保護者や子どもの絵本との関わりや意識を，先行調査の結果と比較してみたい。

Ⅳ．奈良女子大学文学部附属幼稚園幼年教育研究会調査との比較

ここでは，本調査と同じ調査票を用いて1975年に幼稚園を対象として行われた奈良女子大学文学部附属幼稚園幼年教育研究会の調査[4]（以下，「奈良女幼研調査」と略記）との比較を行う。まず，読み聞かせる時間帯については，奈良女幼研調査では「就寝前」がいずれの年齢層でももっとも多く，年齢が高くなるにつれて，その割合は高まっていた。また，読み聞かせ方については，「文をそのまま読む」や「子どもにわかるように読みかえる」が多く，年齢が上の幼児や，男児より女児で「文をそのまま読む」の割合が高かった。加えて，「絵を見ながら子どもが想像したままを話させる」は，女児よりも男児で多かった。これらは，本稿での調査結果と符合するものである。

ただし，絵本の好意度については，若干差が見られた。奈良女幼研調査でも，絵本好きな子どもが多数派ではあったが，その割合は６～９割と，本稿の結果よりもやや低めとなっていた。また，その低い値をとりやすいのは，男児の方であった。本稿では，絵本の好意度に性別による差は見られなかったので，この点で違いが生じている。

ここで，奈良女幼研調査が，「女児に比べて男児のほうが，あまり絵本を好まない子どもが多いようであるが，これは男児は，女児よりは戸外で遊ぶことが多いために家庭で絵本を見ている時間が制約されるためであろう」[10]と指摘していることは重要である。本稿でみられた子どものジェンダーによる差のいくつかも，男児の戸外遊びの多さに起因すると考えられる。さらに，逆に絵本を読むこと自体が，男児よりも女児向きの活動と捉えられているのかもしれない。このような，乳幼児期の遊びや活動のジェンダー化の実態が，絵本体験をめぐるジェンダー差となって表れてきている可能性を見て取ることができる。

これらの点から，絵本をめぐるジェンダー差が，奈良女幼研調査では「絵本体験の実態」と「絵本の好意度」の両者に，今回のＡ町調査では「絵本体験の実態」のみに見られることがわかる。この両者の違いを考える上では，幼稚園と保育所とでは保育時間と降園後に家庭で過ごす時間に差があること，また約30年間という調査時期の差をふまえる必要がある。奈良女幼研調査が行われた30年前には，今より外遊びが活発であり，その分絵本に接する時間が相対的に少ない状況であった。特に，男児では外遊びが盛んで

あったことが，女児よりも男児で「絵本の好意度」が低くなることにつながったと考えられる。このような状況に対しては，外遊びが好きで絵本になかなかなじめない男児に対して幼稚園教諭からの熱心な働きかけがなされ，絵本好きになっていく様子も見られた[11]。ただし，幼稚園では保育時間の短さもあってか,「絵本の好意度」のジェンダー差が解消しきれなかったものと考えられる。

一方,「絵本体験の実態」については，家庭の関わりが大きいと考えられる。Ⅲ節でもみたように，家庭においては女児の方が早くから絵本好きになるきっかけを与えられていた。このことは，絵本自体が,「男児よりも女児向き」のものだとの意識が保護者の間にある程度存在していることが反映していると考えられる。その結果，この30年を経ても,「絵本体験の実態」におけるジェンダー差が残存することになっているといえるだろう。

なお，それ以外の項目については，集計が行われていなかったり，集計方法に問題があったりして（たとえば，複数回答でのべ回答数を100％と計算しているなど），比較することが難しかった。

まとめ ── 先行する女児の絵本体験と保育所・父親に補われる男児の絵本体験

以上，保護者の側，子どもの側の双方の観点から，A町の保育所の子どもの絵本体験の実態をみてきた。ここで明らかになったことは，以下の３点にまとめられる。

第１に，子どもの絵本体験には，年齢の上昇による差異がみられた。保護者の側では，絵本の選定の観点と，読み聞かせ方の点で，子どもの年齢の上昇に伴って絵を重視した姿勢からストーリーを重視した姿勢へと変化していた。また，子どもの側では，１～２歳頃には気に入ったところを拾い読みする読み方が中心であるが，年齢が上昇するにつれて,文をそのまま読むという読み方へと変化していた。このように，子どもの成長に合わせて，保護者からの絵本の与え方も，子どもの絵本の受け取り方も徐々に高度なものとなっていく様子が確認された。

第２に，絵本体験には，ジェンダーによる差異も多く見られた。低年齢に多い気に入ったところだけの拾い読みは男児でも多く見られ，５歳児で頻繁に行われていた文をそのまま読む読み方は女児の方で見られやすかった。この点から，男児に比べ，女児の方がレベルの高い絵本体験をしていると捉えられる。このような差を生みだす一つの要因は，絵本好きになるきっかけである。絵本好きな人の影響や家庭にある絵本の量など，絵本好きになるきっかけは女児の方でより多く提供されており，そのことが，女児が男児よりも早期に高いレベルの絵本体験を獲得する背景にあると考えられる。

一方，第３に，絵本体験の面で後れをとる男児を支える状況も見られた。それは一つには，保育所の存在である。男児の場合，絵本の選定にあたっては保育所で触れたものが参考にされることが多かった。つまり，男児への絵本の提供にあたっては，保育所の役割が大きいことがうかがえる。これらの絵本体験を支える役割は，奈良女幼研調査でも見られたものである。

そして今一つは，父親の存在である。父親は，母親に比べると，読み聞かせに関わる程度は低い。しかし，３歳以上の男児については，４割程度の父親が読み聞かせを行っている。３歳以上の女児の場合，２～３割の父親しか読み聞かせを行っていないのとは対照的である。このように，男児は，特に３歳以上になると，父親によって読み聞かせ体験が補われるようになっている。その効果もあってか，３歳以上では絵本の好意度にジェンダー差は存在しなくなる。３歳以上の男児で父親の読み聞かせの存在感が増す状況については,「父親の帰宅まで起きていられるようになる」とか,「読みたがる絵本が男児向きのもの（たとえば，のりもの，どうぶつ絵本など）になり，それを父親に読んでほしがる」など，いくつかの要因が想像できるが，この点を追求するには，本稿で扱ったデータだけでは不十分である。ただ，いずれにしても，女児に後れをとる男児の絵本体験が，保育所と父親によって補われていることは確認しておいてよいだろう。

以上をふまえ，保育所における絵本を軸とした子育て支援を行う際に配慮されるべきこととして，次の２点が挙げられる。第１に，絵本選定のサポートである。保護者は，子どもの年齢に配慮しながら，与える絵本を選んでいた。そこで，より適切な絵本を選べるようなアドバイスや，保護者が見落としている良書の推薦などを行っていくことが必要だろう。また，第２に，絵本体験のジェンダー差の解消である。絵本体験に関わるジェンダー差をすべて解消すべきだというわけではないが，少なくとも，絵本の好意度や絵本の読み方の面で生じている女児と男児の差は，その後の読書体験の差にもつながりかねない。それゆえ，保育所では，今後も継続して女児にも男児にも同じように絵本に興味を持つような働きかけを行うとともに，家庭に対しても，ジェンダーにかかわらず絵本体験を積んでいくことの重要性を伝えていくことが求められよう。加えて，現在は３歳以上の男児中心であるが，父親の読み聞かせも見られるようになっている。そこで，父親をも対象にした読み聞かせ指導などを通じて，母親も父親も，あるいは女児・男児も区別なく読み聞かせが行われるような環境づくりを進めていくことで，父親の育児参加をより拡充していくことも大切になるだろう。

A町をはじめ，全国の保育現場で，よりよい絵本体験を子どもに提供するという目標を共有しながら，保育現場と家庭の連携が一層進められることを期待したい。

文献

１）横山真貴子，上野由利子，長谷川かおり，木村公美，石田晶子，原田真智子：５歳児の家庭における絵本体験

の特徴 ― 母親への質問紙調査から見る３年間の家庭での絵本とのかかわりの変化．奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，18，23-32，2009.
2）文部科学省：幼稚園教育要領．2008.
3）厚生労働省：保育所保育指針．2008.
4）奈良女子大学文学部附属幼稚園幼年教育研究会編：絵本との出会い ― ３・４・５歳児の指導．ひかりのくに，1976.
5）秋田喜代美，無藤隆：幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討．教育心理学研究，44（1），109-120，1996.
6）後藤ヨシ子，前田敦子：絵本と親子交流に関する研究．長崎大学教育学部紀要教科教育，43，75-83，2004.
7）横山真貴子：３歳児の幼稚園における絵本とのかかわりと家庭での絵本体験との関連 ― 入園直後の１学期間の絵本とのかかわりの分析から．奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，15，91-99，2006.
8）横山真貴子，上野由利子，木村公美，原田真智子：４歳児の家庭における絵本体験の特徴 ― 幼稚園での絵本体験の影響をふまえての分析．奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，16，49-58，2007.
9）川井蔦栄，高橋美知子，古橋エツ子：絵本の読み聞かせと親子のコミュニケーション．花園大学社会福祉学部研究紀要，16，83-96，2008.
10）前掲４），p．70.
11）前掲４），pp．253-259.

謝辞

本調査にご協力いただいた保護者の皆様，ならびに本調査の実施に当たられたＡ町保育協議会の先生方には，調査分析や研究発表の機会をいただくなど，本稿の執筆に多大なるご協力をいただいた。記して感謝したい。

Child-Rearing Support Centered on Picture-book in Nursery School and Children's Picture-Book Experiences at Home: A Case Study of A Town, Okayama Prefecture

Kei SHINDO, Norie TAKATSUKI

Department of Early Childhood Education, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summaly

We tried to clarify children's picture-book experiences using the questionnaire to their parents. As a result, the following points became clear. First, there was the change accompanying growth in children's picture-book experiences. Second, there was the difference based on gender in their experiences. The girl's experiences were superior to the boy's them. Third, some practices which supplement the shortage of boy's experience were existed. For example, father read a picture-book to boy rather than girl. A nursery school is asked for doing the child-rearing support centered on picture-book —— guidance for the way of selecting and reading a picture-book and so on.

Key words: picture-book experience, child-rearing support, nursery school